

朝明溪谷から杉峠、そして甲津畑へ越える道は千種越えと呼ばれる古道である。いまの道は根ノ平峠からコクイ谷分岐をすぎて御池鉱山跡に至るが、古道は愛知川と上水晶谷出合までゆきそこから愛知川を渡って小峠へ登っていた。そして路肩の悪い猪ノ子谷をトラバースしながら上を見ると、古い鉱山の採掘跡が口を開けている。高昌鉱山である。このまま沢を横切ると山腹に整然と幾重もの石垣が残る。これが高昌鉱山住居跡だ。

ある年の秋、ふわくで高昌山 1125mへ登ろうとここを通過した。そのとき偶然、この鉱山で働いていたという人に出会い、立ち話ながら昔の思い出を聞かせてもらった。

「私は戦後の昭和23年から2、3年間ここで働きました。坑道はみな横穴だったが、3坑が一番深くて北東に1里ほど伸びていたね。見習いだったのでトロッコ押しをやりました。本坑道の上に登るハシゴがあって、そこに登って3坑からの鉱石をトロで運び、本坑へ落とす仕事でした。本坑からはまた外へ運びだして、ケーブルで朝明ヒュッテの前まで運び出す。メガネ岩の中をケーブルが走っていたのを思い出しますわ。これがその鉱石です」

その人は足元から金糞を拾って見せてくれた。

「そのころ、飯場は2棟あって12人～13人が寝泊りしていたね。もう郵便局とか小学校とかはなかったな。神社の鳥居はあったけど」

高昌鉱山主は東京の重井平四郎という人。なんでも戦後の闇成金とかの噂だった。鉱山の規模は戦前に掘られた坑跡を、そのままさらえた程度だった。5人～6人が交代で働いてバラック建築の小さな飯場に起居していた。戦前の最盛期には沢山の住宅があり、当時の住居の残骸や石垣もきちんと残っていたそうだ。鉱山関係の人の米や野菜などは菰野から運んだが、鉱石はワイヤーで根ノ平峠から下ろし、三重県側に運び出していた。

高昌鉱山が最盛期だったのは明治末期。八日市の歴史家の調査では、明治36年～39年ごろの従業員数80人。銀、銅の産出高は72,731斤。販売額38,302円とある。日当は男40銭、女16銭。このころの物価は米1升14銭、酒1升26銭。男の日当を換算すると日当2千円ぐらいに相当する。他の仕事に比べるとかなり高額であった。

「そうだな。1俵17貫もある鉱石を肩に担いで林道まで運び出していた。

元気な人は2俵も担ぐ者もおった。1俵40銭か50銭の手間賃だったらしいね。

それからこの谷を見てごらんよ、いまも樹木も草も何も生えてないね。

これは上流で鉱石を洗うものだから沢の水が濁る。その毒のためにいまでもなにも生えないんだよ。鉱山があったころも飲み水はほかの沢から水を酌んできたね」

このあたりの雨乞岳、杉峠、コクイ谷、オゾ谷一帯では昭和30年代まで細々と操業が続いていたようだ。

事実、昭和25年ごろも東雨乞岳や御在所から谷を見ると、御池鉱山などがインカの遺跡のように建物や石垣が整然と並び、残務整理の人がアマゴの養殖をしていた。

鉱石搬出具

